岩 波 文 庫

33-135-3

工　　場

── 小説・女工哀史 2 ──

細 井 和 喜 蔵 作

岩 波 書 店

目　次

第一篇……5
第二篇……87
第三篇……179
第四篇……289
注……419

［解説］工場労働と人間疎外 …… 鎌田 慧 …… 507
［解説］工場生活が生み出した異色のリアリズム …… 松本 満 …… 523
関連地図 …… 550
『奴隷』『工場』の校訂と付注の共同作業について …… 551

第一篇

一

堺署を出た三好江治は、懐中にたった四銭しかお銭を持っていなかった。彼は街頭にたたずんで、（さて、これからどうしたらいいだろう？）と考える。すると空腹が襲ってきて家も何も見えない遠くの方から、飯屋の味噌汁の匂いが急に活気づいた胃袋の中へ流れ込んで残酷に食欲をそそるのであった。けれども四銭の持ちあわせではその芳香を辿って縄暖簾[1]のある方角へ行くことができない。彼はその反対の方向を取って、朝の市街をどしどし海岸の方へ進んで行った。

恋と発明の抱負に破れ、堺の廃港[2]へ投身して厭世自殺を遂げたが、意識を失うとすぐに潮湯[3]の火夫に引き揚げられて蘇生した江治は、一週間の冥想によって初めて自己を発見した。吹く風のまにまに、環境に支配されては動いていた奴隷の彼は、今や一個の自覚した労働者として高遠な理想を抱き、主義[4]を持って第二の自分が新しい旅を行く目標をしっかりと定めた。人類の到達すべき真理を、巨大なフラスコの中へ自己を投じて試

した思い切った実験によって確実に把握したのである。しかし彼は、徹頭徹尾金のために支配を受け、一刻も貨幣を無視しては立つことのできぬ現実に直面して、はたと行き迷わねばならなかった。

（ちえッ！　癪だ、四銭では第一飯を食うことすらも不可能だ）彼は差し当たっての問題をまだ考えていなかった。けれどもまず何かを食わねばならぬ。

――爽やかな初夏の朝を、江治は場末の方へ出てどこか焼芋屋がないかと捜し回った。そうして二軒それらしい家の前を立ち覗いたが、まだ時間が早すぎるので品物は店へ出ていなかった。それに、ふとこの季節外れ、焼芋なんか捜して歩くことは無効だと気づいて彼は失望を感じた。いろんな想念に頭を奪われて季節のことも考えなかったのであるが、六月といえばもう[5]旧芋が切れて、焼芋屋は新芋の出る晩秋まで釜の蓋を閉じている時である。芋屋の店頭には小指みたいに[6]小っちゃげな[7]赤芋の蒸したやつが、笊へ入れられて申し訳ほどに出されて眼の球が飛び出すくらい高い。（こいつぁいかん、何か四銭でたらふく食える嵩高いものはないかしらん）彼はこう思った。けれどもそれはとてもありそうにない無理な注文に属した。

江治は大浜の[8]海岸にタオル工場のあったことを思い浮かべて、もしや雇ってはくれないか志願してみようと考えて再び大浜へやって来た。と、海は穏やかな波を打って憎ら

しいほど平和に、浜の砂地を洗ってい、墨絵のような淡路島の影が呼べば応えそうに近く見えた。そして涯しもなく続いた碧水[9]が溢れるように丸く盛りあがった上にさまざまな船が浮かんでいる。彼は壮大な海の景色に呑まれてしばし空腹を打ち忘れたものの如く、かつての日投水台[10]の役をつとめてくれた潮湯の桟橋から七、八丁距[11]たった地点にあるタオル工場へ赴いた。

工場はどこへ行っても誂えたように決まった建築様式をなしている。一本の煙突を中心にタンクと塵突が聳え立ち、鋸歯状[12]の屋根が幾棟か追いかぶさるように並んでそれに日本家屋の寄宿舎を副えたものである。門衛所には、鶴を三羽描いた金モール[13]の帽章をつけた門番が二人詰めていた。煉瓦壁を洩れてザァ……という瀑布の落水を聞くような力織機の音が伝わってくる。

「おはようございます。あのちょっとお尋ねいたしますが、職工係[14]のお方はまだお見えになりませんでしょうか？」

江治は丁寧に頭を下げて門番に訊いた。

「何や？　君。」

「志願です。こちらに男工はご入り用になりゃせんか、ちょっとお尋ねしてみたいと思って。」

「男工は要らん、いま余り返っとる。女工やったらなんぼでも入れるけんどな。君は何がいけるんや？」

「織布の機械直しでも、保全でも、どっちでもできますが……。」

「要らんなあ、今のところは。」

門番はこう言って職工係に取り次ぎもせず、手もなく彼をはねつけてしまう。横柄な奴だとは思ったが、食ってかかってみても始まらぬので彼はすごすごタオル工場の門を去った。が、怖ろしい不安に襲われて工場の敷地をやや出離れると、砂浜の上へのめるように立ち竦んだ。堺にはその工場のほかに三つも紡績があることを彼は識っていた。けれど、いずれも紡績専業の工場のみで織布部のあるところはタオル工場一軒しかなかった。それで、そこが駄目となれば差し当たりその市では職業を得られない訳である。

（大阪へ帰ろう、歩いて帰ろう）しばらくしてから、江治は決心した。そして浜を引き返して紀州街道へ続く阪堺[15]線の電車通りへ出る。

交差点の角にある大きなパン屋の店棚には、まだほけの立つような食パン[16]や菓子パンが惜しげもなく薪か何ぞの如く積み重ねられて、その美しい狐色の肌で彼を騙そうとするように引きつけた。しかし二銭不足なため食パン半斤買うことはできなかった。三銭のジャムパンと一銭の餡パンが、一個ずつ江治の手に渡されたのであった。

＊　＊　＊

大和川[17]七道を越えると広漠とした平野を紀州街道[18]がまっすぐに大阪へ向けて走っていた。二つの菓子パンでやっとおぼろげな腹を作った江治は、市を離れる時通りがかりにあった水道栓のコックを咥えてがぶがぶ水を飲み、脚にまかせてすたこら街道をてくるのであった。両側の田圃には、菜園の手入れや田植えの拵えなどに働いている農夫たちの姿がのどかそうに見られた。

住吉を過ぎてしばらく行くと一帯の空豆畑に続いて二十坪ほど胡瓜が作ってあった。そして手の代わりに畦[20]から畦へ渡して敷いた麦藁の上に、早生りのやつがバナナほどの大きさをしていくつもなっていた。

過激な労働ですぐ減ってしまうゆえ、粗食を多量に摂る癖がついて胃拡張[21]に陥っている江治は、真似糞ほどの菓子パンなどすでにもうとくの昔どこかへ消え去ってしまい、またしてもかなりな空腹を覚えてき、みずみずしい胡瓜の色合いと新鮮な匂いが誘うように官能を刺戟するのだった。そして付近の田圃にはちょうど幸い人がいない。

（ええい、一本失敬してやれ……）彼は咄嗟にこう思ってつかつかと街道を降りた。しかし胡瓜畑の畦へひと足ふみ入れた次の瞬間、はっとして出した足を後ろへ引いた。

「いけない！」と良心は叱る。「おい、作り主のある物を黙って失敬すれば盗人じゃない

か。そして同じ盗人のうちでも、真面目な百姓の労働の結晶物を取る野良盗人は、一番その罪が重いということをお前は知っているはずだ。それにまた、人が見ておらないから黙って失敬しようなんて、どだいすることが卑怯だ、凡庸だ。」

彼はてれ隠しに路傍のたんぽぽを三株ほど引きむしってぽいと畑へ投げ棄てた。そうしてぐいと唾を呑み込んで、一憩いするために草の上へ腰をおろす。

巨大な大阪がどす黒い煙に包囲されてもう間近に迫って横たわっていた。[23]木津川の[24]尻辺に当たるらしいところには、造船所の起重機が傲然として王者のように立ちはだかり、さまざまな大工場の煙突が皆一様に濛々たる黒煙を間断なく空へ向けて吐き出していた。そしてその煙はさすがに広大な空間でもはけ場を失ったものの如くひと塊になって渦巻き、市街の上空を一面の暗い傘で蔽っている。その反対の方にはパリのエッフェル塔を真似た新世界の通天閣が、煙に霞んだ市街の[26]甍を抜いて聳えていた。刻々としてあらゆるものが活動している市の響きが、山鳴りのように伝わってくる……。

前は南海電車の本線だった。架空線式の電車線路が、平野の間に少し高く盛り上げられた土手を、送電線の電柱と共にまっすぐに走っている。六月の太陽に照らされて四本の[27]軌条がギラギラと光った。

江治は何心なく前へ眼を馳せていると、大阪へ上って行く大きな[28]ボギー車が地響きを

立てて唸りながら疾走して来た。そして彼の憩っているところから半丁ほど距たった真向こうへ差しかかると、突如として[29]大篝籠くらいな籠に収穫物を背負った一人の百姓が、向こうの畑から線路の土手へ登って来た。と、運転手は愕いてけたたましい警笛を鳴らした。江治は(あッ！　危ない)と思って我がことのように固くなった。すると次の[30]一刹那、ボギー車の車頭でパッと一条の白煙が閃いた。ほんの、計ることのできないような短いあいだである。運転手は電気制動装置を応用して二[31]間ほど行ったところで車を停めた。

彼は無意識に草の上から立ちあがった。そうして畔道を踏み分けて電車線路へ駈けつけてみると籠を背負ったままで、一人の百姓男が土手の向こう側の溝のようなところへ落っこちて即死を遂げていた。そしてその辺り一帯に小石をばら撒いた如く馬鈴薯が散らかっている。男の乗客たちはおおかた皆車から飛び降りて線路の上へ出てしまい、女の乗客もまた車窓から頸を出してがやがや騒いでいた。乗務員は車を棄てて土手の下へ行き、その百姓を起こしてみて蒼くなっていた。

江治は乗客たちに混じってしばしのあいだ茫然として即死者を観ていたが、数分後ふとわれにかえって、自分は何のためにここへやって来たのだと考えた。(一刻も早く大阪へ帰って職業を探しあて、パンの道にありつかねばならんのに何を道草食っている)

だが、そのとき不意に彼の頭に浮かんだことがあった。

＊　＊　＊

しばらくすると車掌が、

「さあ、皆さん出ますよ、発車します。発車しますから乗ってください。」と言って降りていた乗客たちを車へ追い上げる。江治は何食わぬ顔をして、その電車へ乗っかってしまった。そして今の農夫の死について誰が彼に同情を寄せて眺めたであろう？　わざわざ電車を飛び降りてまで見物していた大勢は、皆人の悲惨な奇禍を面白半分に傍観していた連中ばかりであろう。現に自分も単なる好奇心でそこまで馳せつけて行った一人じゃないか。またああいう不可抗な場合に人を轢いたことによってすら罪に問われねばならぬ運転手の職業に、理解をもつ者が何人あるだろうか、など考えながら間もなく難波駅へ着いてしまった。

彼は大勢の乗客と一緒にどやどやっと着[33]車点へ降りたが、出口へは行かずにすぐ駅長室へ出向いて行った。そしてその車の方向札を見ておいて、

「私は、今の人を轢いた電車に浜寺公園から乗りました者です。ところがちょうど窓から頸を出して外を覗いていたとき、突然、電車も何も飛びあがってしまうような激しい停まり方をしたものですから、そのとき帽子の鉢巻に挟んでいた切符を、買い立ての

麦稈帽子[34]と一緒こたに溝の中へ落としてしまいましたのです。」と弁明した。すると駅長は、

「窓から頸を出されることは、危険ですからなるべくやめてください。」と一応たしなめた。

「はあ、もう懲り懲りしましたから注意します。」

「乗客規定としましては、切符を紛失された場合、もう一度お気の毒様でも乗車賃を支払っていただかねばならんことになっていますがねぇ、しかし……。」

「私は、今朝この難波から往復切符を買って浜寺へ行ったものですから、もう銭を持っていないのです。」

「どうぞ、これから切符はなるべく大切にしてください。」

「はあ、畏まりました。」

彼は駅長に向かって、さながら主人のように腰低く頭を下げて出た。

「これを、改札に渡してください。」

すると駅長は、こう言って一枚のメモに何だか符号のようなものを書きつけ、それに判を捺して切符紛失者であることを承認してくれる。

江治は偶然な思いつきが巧く当たったことを喜びながら電車のただ乗りをして悠々と